

## 特集用・宮崎会員の「忘れぬ労使の人々」第25話

### 「強面の人」 中村金夫 日本興業銀行元頭取

中村金夫さんは生産性本部の情報化推進委員会のうるさ型の委員で日本興業銀行（以下興銀）の前頭取である。

1980年代中頃から始まった好景気は、バブル景気と称され土地や株など資産価値の高騰を招いた。大方の国民は豊さを実感し、世界から注目される日本経済の繁栄がこれからも限りなく続いていくものと錯覚したものである。

1991年ごろ、いわゆるバブル経済の崩壊が起こった。それまで右肩上がりの経済成長が続けていた日本は、市場にダブついていた資金の貸し付けにいずれの金融機関も血道をあげていた。当然バブルが崩壊すると、貸しつけてきた銀行の不良債権問題が、にわかに表面化し絶対安全、潰れるはずはないと信じていた銀行に対する信頼がもろくも崩れ去っていき、金融不安は社会問題化し国中を混乱の渦に巻き込んだ。

政府は公的資金の注入による金融機関の救済など様々な措置をとった。やがて金融機関の再編が始まり個人の預金さえ引出金額に一定の枠がはめられるといった混乱の中、各行ともそれまで抱え込んでしまった不良債権の処理に躍起となった。

当然新規貸付けにはきわめて厳しく、挙句の果てには貸し付けていた資金を貸しはがすなど過酷な手を打ちながら、各行とも生き残りをかけた自衛策に狂奔した。金融を巡る嵐は日本中に吹きまくり巨大銀行の合併が相次いだ。

興銀は日本経済を支える産業社会への貸し付けが主たる役割であり、巨額の投資を必要とする企業の資金調達に应运ってきたのである。極論すれば戦後から高度経済成長期を経て日本が世界の一等国にのし上がることができたのは、銀行の中の銀行といった趣の興銀がその下支えをして来たといっても決して過言ではあるまい。

中村金夫さんはバブル崩壊前の日本経済が最高潮にあった時の興銀の頭取であり、興銀という金看板を背負い飛ぶ鳥を落とす勢いのワンマンで、強い指導力をもつ人として経済界からは一目置かれる存在であった。



左から諸井虔・中村金夫・西和彦の諸氏

端で見えていても、氏はなかなかの癪癢持ちで齒に衣着せずに物を言う方であったし、相手側は興銀の袴を着て強い物言いをされると面と向かって反論しにくいのは当然であろう。

委員会でもウルサ方なので中村さんには特別に、あらかじめ丸の内にある興銀へ事務局から私が出向き事前説明とご意見拝聴に伺ったものである。それも毎度のことである。

そうこうしているうちに気難しい中村さんともすっかり打ち解け、顔なじみになりいつの間にか仕事以外の私的な会話も交わすようになった。それでも時々委員会で

まとまりかけた統一見解を覆すようなコメントや意見を私に述べられる。

そういう時私は中村さんの睨みつけるような怖そうな顔をしっかりと見て、負けず譲らずに、「無理を言わないでください」とか、「委員会の席上ではなく、いまさら私的な見解をここで聞かされても困ります」と面と向かって申し上げた。

自分の意見に反論され物言われた経験があまりないのだろう。いっとき氏は鼻白んで声を荒げてムツとするが「まあ仕方ないか、任せるよ」と引き下がってくれる。

中村さんは生真面目でいかにも銀行マンらしい方だが、話題は豊富で雑談になると様々な話を私に聞かせてくれる。大概約束の時間より 30 分はオーバーする。いつも同席する調査役から「中村は話し相手に宮崎さんを気にいっているようですよ。無理を言いますがよろしく」と帰りのエレベータの前でささやかれた事もあった。



左二人目西和彦氏ハウステンボスにて

ある時中村さんから「きみは顔が広いようだが、興銀の融資先である長崎のハウステンボスへ泊りがけで行ってみてくれないかな」とさりげなく頼まれた。

上司の了解をもらい、委員会のメンバーである情報誌アスキーの社長を務め今や時代の寵児と目される西和彦氏を誘い 5 人ほどで出かけた。

後で関係者に聞くとハウステンボスのホテルは宿泊料金が高価で宿泊客が少なく、ドル箱であるはずのホテル収益が目算外れで興銀の元頭取まで営業の手伝いをさせられるほど業績が良くないとの裏情報であった。

ある時渋谷の事務所に興銀秘書から電話がかかってきた。「もし時間があったらこれから中村の話し相手に来てもらえないか？」唐突な話である。

「委員会の打ち合わせでしょうか」と問うと「いいえ、朝からちょっとご機嫌なめなので、宮崎さんに少し話し相手になってもらおうと思ひまして・・・」というものだった。

考えてみると変な話だが部員に断りを入れて、すぐに丸の内の興銀へ向かった。

役員応接室に通され、しばらくすると中村氏が来られた。

「どうした、何か用かね？ちょっと今日は忙しいのだがね」「ハイ次回の委員会の議案について、あらかじめご意見をいただこうと思ひまして伺いました。すぐ退散します」といいながら取り留めのない話などを始めた。三十分もした頃、「それではこれで失礼します」と席を立とうとした「まあいいじゃないか、さっき君の言っていた絵の話だが当行にも昔からいい絵画が沢山あってな。君の後ろにあるのは小さいがルオーだよ、廊下や各部屋にも何点かいい絵があるよ。君が絵を好きだとはなあ・・・」

と言いながら、「興銀には以前もっと絵が沢山あったのだが、役員が退職するとき記念に持たせたりしたので今は少なくなってしまったがね。昔は銀行も鷹揚なものだったのだな。今の世の中はせちがらくて



シャガールの絵の前の中村金雄氏

いかんねえ」とちょっと昔を思い出したのかしんみりした口調で呟いた。

私はたまたま持っていたカメラを取り出し「中村さんこの絵をバックにご一緒に記念写真を撮りたいのですが・・・」という「おう、いいね。僕はこちらのシャガールの方が好きなのだ、バックはこれにしようや」とシャガールの絵の前に立たれたのである。

中村さんの委員会には秩父セメントの諸井虔会長も委員として名を連ねていた。あるとき私に「諸井君はなあ、昔若いころ心臓の手術をしたのだ。無理させるなよ。彼は頑張ってしまう男だからね」と忠告してくれた。

中村さんが興銀の課長を務めていた時、直属の部下に諸井虔さんがいた。中村さんは「諸井君は非常に頑張り屋でなあ、入院した時に見舞いに行ってみると、おとなしくしているのかと思ったらベットの上で仕事をしていたのだよ。驚いたね。彼はそういう男だよ」と間わず語りに教えてくれたのである。

日本生産性本部は毎年、三井造船のふじ丸や日本郵船の飛鳥といった豪華客船をチャーターし“生産性の船”と称する洋上研修船をシンガポールや香港、中国などへ派遣していた。

全国の様々な企業から募った参加者は、300名から時には400名にも及び、これを率いる生産性の船の団長は、財界の有力者に引き受けていただくことが恒例となっていた。

ある年、団長候補に興銀の中村金夫さんの名前が上がり、面識がある私がネゴに伺うことになった。

生産性の船の趣旨や団長の役割など大要を聞いた中村さんは「君と一緒に行くなら引き受けてもいいよ」とあっさり承知していただいた。

勇躍生産性本部へ立ち戻り席に着くやいなや部員から「興銀の中村様に至急電話を入れてください」と告げられた。

「モシモシ、宮崎です先ほどはありがとうございました」「宮崎さんすまない。考えたらやっぱり難しいので今回は辞退するよ」「いかがしたのでしょうか、何か不都合でも・・・？」「うん、僕のところには、まだばあさんがいてね。年が年なのでほったらかして出かけるのはどうもね。まあばあさんがいなくなったら改めて引き受けるよ。その時は一緒に行こうな」というものであった。

それからしばらくして新聞の朝刊記事で中村金夫さんが他界したことを知り大きなショックを受け愕然とした。

たぶんご母堂より先に旅立たれてしまったように思う。私は中村さんには失礼ながら“年上でちょっと我儘な親しい友人”をにわかに失ったような心地がして、何も考えられずしばらくぼんやりしてしまった。